つた事もあつたであらうと想像するは必ずしも非禮ではなからう。病氣のために特定の女と契る機會が無かつたまでゞあるに違ひない。果然、或時、平福百穗氏に送つた手紙で、

……果敢なき一篇の情史、語つて未だ盡き不申候。小生は齋藤茂吉君の

ひとりのみ朝の飯はむあが命短かからむとおもひて飯はむ

の絶唱を解するを得て、同君の前に小生の心理を打明け申度、今日手紙差出し申候。

小生の身體をめぐる血液を測つて數代の前には今もなほ櫟芒の間に尾を摺る雉子の羽ほどの色彩は有之候ひき。小生は今三十四年にしてつく〴〵婦人に運なき生涯を歎じ申候。

といつてをる。生れて三十四年、といへば節の年齡から推せば恰も大正元年である。この手紙で、婦人に運なき生涯を歎ずといつてをるのは、彼の眞實の告白であらう。併しかく歎いて友に愬へた裏面には、人知れぬ心の惱みが彼にあつたことを思はせる。事實、彼には思ふ人があつた。その人も彼を思ふてゐた。然しその思ひは事情あつて遂げられなかつた。彼も彼女も恰もその頃、ブロークン、ハートだつたのである。その事情を私は知らない。思ふに彼が惡病に罹つた爲であらう。もしも彼が病氣に罹らなかつたならば、二人の思ひは遂げられ、節の晩年はもつと明るく、幸福なものになつたであらうが、運命の神は遂に彼を拉して暗い方へ導いてしまつたのであつた。

破れた思ひを抱いて、節は上京し、岡田博士の診察をうけ、根岸の病院に入つた。彼は病患になやむと共にわが思ひになやんだ、さうしてこの胸のなやみは、彼の死に至るまで彼を苦しめた。病室でも、旅館でも、旅の上でも、彼は、常に、思ひなやんでゐた。遂に光のさゝぬ深い思ひを抱いて、九州のはてに、暗く哀しく死んで行つたかとおもふと、私は涙を流さずには居られない。花は蕾のまゝで散つたのであつた。

根岸の病院に入院中、或る日、女が鄕里から贈物を携へて、節を訪ねて來たが、折惡しく、彼が一寸外出した後であつた。女は家の者を欺いて出京したのであつた。節は殘念で殘念でたまらなかつた。併し女はもう歸つて去つた後で、何とも仕方がない。その時の狀は彼の病中雜詠其一の詞書に詳しく記るされてある。これはすでに歌と共に引用したのであるが、今一回こゝにも揭げる。曰く、

明治四十四年十二月二十四日、ふと出てあるくことありて、此日ばかり夜に入りて病室にかへりくれば、結びしまゝに派手なる袱紗の包み一つ電燈の下に置かれたり。怪しみて解きみれば我が爲に心づくしの品は出て來たるに、赤きインクもて書かれし手紙も添へられつ。四度まで立ち入りがてに病院の門を行き過ごして、今日初めて訪れきといふに思ひ設けぬことなれば、待たんやうもなく、今は悔ゆれども及ばずなりぬ。されどわれ生れて三十三年、はじめて婦人の情味を解したるをおぼえぬ。我は感謝の念に堪へず、その人一度は我と手を携ふべかりつるに、惡性の病生じたれば、我に引きとむる力もなく、斯くて離れたるものゝ會ふべき機會は永久に失はれ果てぬ。その夜はふくるまで思ひの限り長き手紙に筆とりて、生涯の願ひ今一度訪れ給ひてんやと書きつけけるを夜もすがら思ひは搔き亂れて、明くれば痛き頭をおさへつゝ、庭の寒き梢に眼を放ちて、として一首の歌がある。その歌は

四十雀なにさはいそぐこゝにある松が枝にはしばしだに居よ

卽ち、われ生れて三十三年、初めて婦人の情味を知りぬとある（右にかゝげた百穗氏への手紙參照）それ程彼は歡喜した。而もその歡喜は遂に空しいものに過ぎなかつた。二人の思ひは遂げられなかつたのである。彼女は節を思ひ乍らも、節のところへ來ることが出來なかつたのである。この間の哀しい消息を、島木赤彦氏が、後にアラヽギの節追悼號で、「長塚さん」と題して述べてある中に、

常に確かに自己の地歩を踏みしめて凡ての男と女とに對してゐた長塚さんが、その地歩に甚しき動搖の念を抱くに至つたかと思はれることが生涯にたゞ一つあつた。さうして、それが、長塚さんの發病後に起つた事件で、生を終るまで、除去されぬ事件であつたことを痛ましく思はずにはゐられぬ。

といつてをるのは、まことによく故人を知るものゝ追悼の語である。

同じ文で、島木氏は更にいふ——

去年の四月僕が上京した時、長塚さんは橋田病院にゐた。何年ぶりかで逢つたのであるが、思つたより衰へてゐなかつた。そして例によつて元氣よく話した（略）長塚さんが病院から僕の下宿（註、小石川區上富坂いろは館であらう）を訪ねて來てくれた時、齋藤君と中村君とが來て

ゐた。四人で蕎麥屋へ行つて夕飯をすました。三人は酒をのんだ。酒をのまぬのは無論長塚さんである。長塚さんはその夜非常に興奮してゐた。僕は生涯寂しいのだといふことをそばを食べてしまつてから一二度口から洩した。歸りがけにそば屋の出先きの途で、長塚さんはふみ止つた。僕は生涯一人だといふことを又こゝでいはれた。この言葉を聽き取るには僕が一番都合よき位置に並んで立つてゐた。僕は長塚さんの事件をこれ前に少し知つてゐた。そうして僕にも故郷を出たいろ〳〵の感情が動いてゐる時だつたので、長塚さんのこの一言が、腸にしみるやうな思ひがした。僕は酒に醉つてゐた。言ひたいことが胸にいつぱいになつたやうな氣がしたけれど、例によつて、さういふ場合に旨く口に出て來ないので、止めてしまつた。下宿に歸つてから急いで手紙を書いて長塚さんに出した。さうして大に長塚さんに對して奮勵と光とを與へるつもりであつた。これは後から考へると僕の身知らずの滑稽、象て長塚さん知らずの滑稽であつた。返事はすぐに來た。

島木氏は續けて其後を記るして曰く、

長塚さんを訪ぬることが一日延び二日延びしてゐると、病院から電話がかゝつて來た。

（中略）すぐに病院へ出掛けて行つた。

長塚さんはこの日その哀れむべき女性に就いて殘らずを話して聞かせた。三年以前、長塚さんの病氣によつて婚約が破れて以來、かの女は一家に引き籠つて殆ど一回も外出をしないでゐるといふ驚くべき事實をも話した。そして生れて以來唯一度家人をだまして內密で病院に見舞に來たといふことをも話した。枕頭の瓶に活けた草花はその人の持つて來た花であることも話した。その花を長塚さんがどんなにして毎日見てゐられたかはアラ、ギに出た「鍼の如く」の歌をみればよく解る。僕は此の日前夜の醉つた時に較べると、餘程冷靜にしてゐられた。それでも事實は甚しく僕を感動させた。それから後長塚さんから餘程頻繁に電話をかけて來た。大抵の場合に僕も出掛けて行つた。

此頃長塚さんは不眠に陷つてゐた。體が衰弱して眼が光つてゐた。彼女性が二度目の訪問に來たことも話した。そして元來が良心の純粹に發達してゐる女性が家人を欺いてひそかに會ひに來たことを非常の罪科と考へて、到頭耐へきれずに一々家人に表白したこ

とを手紙で知らせて來たことも話した。家人に大へん叱られたと知らせて來たことも話した。もう今後は訪問を思ひ止まる、どうか屹度癒つて下さい。いつまでも待つてをると書いて來たことも話した。さういふ話をする時にも長塚さんは決して自己を取り亂すといふことはなかつた。反對に僕の方が感激しさうになつてゐた。(略)

……長塚さんは堪へうべき凡てのものを堪へやうとする風にしてゐた。それ程にしてゐた長塚さんが、終ひには堪へられないで、家人の留守に一度その人を訪問したこともある。翌くる日になつて家人から手紙が來た。家人不在中の訪問は遠慮して貰ひたいといふ手紙である。この手紙は長塚さんも可成の興奮を以て僕に見せた。他人の手紙を僕にみせたのは長塚さんの一生中たゞこの一度であつた。

この島木氏の文章は女性についての節の消息を最もよく傳へてゐる。

二

今私は、「鉞の如く」の中によくあらはれてをると、島木氏がいつてをる其歌を見やう。

大正三年神田の橋田病院に入院中の歌である。

病院の生活もすでに久しくなりける程に四月二十七日夜遅く手紙つきぬ。女の手なり。

春雨にぬれて屆けば見すまじき手紙の糊もはげて居にけり

五月六日、立藤、金せん、ひめぢをんなどくさ〳〵の花持て來てくれぬ。手紙の主なり。

淋しき枕頭に取りもあへず、

藥瓶さがしもてれば逝く春のしどろに草の花活けにけり

草の花はやがて衰へ行けどもせめては透きとほりたる瓶の水の新しきを欲す

いさゝかも濁れる水をかへさせて冷めたからむと手も觸れてみし

いつの間にか立藤はすてられ、金せんはぞろりとこぼれたるに夏の草なればにや矢車のみ

ひとりいつまでも心强げに見ゆれば

朝毎にひとつふたつと減りゆくに何がのこらむ矢車の花

うなだれてわびしき花のをだまきは萎みてあせぬ矢車の花

風邪ひきていとひし窓も開けたればすなはちゆるゝ矢車の花

五月十日又草の花持て來てくれぬ。鐵砲百合とスキートピーなり。さきのは皆捨てさせて心も清々しきにいつの間にか大いなる百合のつぼみひそかに綻びたるに

こゝろぐき鐵砲百合かわが語るかたへに深く耳開きをり

十一日の夜に入りはじめて百合の香りの高きをきく。この夜ものおもふことありけるに明日の疲れ恐しければ好まざれども、睡眠劑を服す。入院以來これにて二度目なり。

うつゝなきねむり藥の利きごころ百合のかはりにつゝまれにけり。

東聲曰、何等の佳調ぞ。幽韻ぞ。

貧しき人々の住む家なれば棟にあまた草生ひたれども暫て取ることもなきぞと見るに窓の外は薹ばかりのわびしきに苦菜ほうけて春逝かむとす

東聲曰、春いたづらに更けて、人の惱みは消すべくもないのである。

窓を壓して梧桐の木わだかまれり、はじめのほどに

春雨になまめきわたる庭の内に愚かなりける梧桐の木か

とよみおきけるが、今は梢のさやぎも著しく

窓掛はおほにな引きそ梧桐の嫩葉の雨はしめやかに暮れぬ

熱少し高けれどもたまゝ〳〵出でありくこともあり

あかしやの花さく陰の草むしろねなむと思ふ疲れごころに

○

五月二十二日夜こゝろに苦惱やみがたきこと起りて

小夜ふけてあいろもわかず悶ゆれば明日は疲れてまた眠るらむ

おそろしき鏡の中のわが目などおもひうかべぬ眠られぬ夜は

よしといへば水には足はひたせどもいたづらにして小夜ふけにけり

すべもなく髪をさすればさらさらと響きて耳は冴えにけるかも

やはらかきくくり枕の蕎麥殼も耳にはきしむ身じろぐたびに

ゆくりなく手もておもてを掩へればあな煩はし我手なれども

手紙のはしに必ず癒えよと人のいひこすことのしみ〴〵とうれしけれど

ひたすらに病癒えなとおもへども悲しきときは飯減りにけり

菖蒲圃に身をいたはることも七十日にあまりたれど、自ら幾何も快きことを覺えず

頰の肉落ちぬと人の驚くに落ちけるかもとさすりても見し

いぶせきに明日は剃らなと思ひつつ髭の剃杭のびにけるかも

物質上の損失はおほくは同情者の手によりて容易に補給せらるべきも、精神上の缺陷は同情者の手によりて凡て直ちに解決せらるべきものなるべからず、如何に深厚の同情と雖も其効果は概ね甚だ僅少なるべきなり、然れども其効果の僅少なるが爲に、遂に人間至高の價値を沒却すべからず。

いささかのことなりながら痒きとき身にしみて人の爪ぞうれしき

健康者は常に健康者の心を以つて心となす、もとより然るべきなり、只羸弱の病者に臨む時といへども、いくばくも異る所なきが如きものあるを憾みとすることなきにあらず。

すこやかにありける人は心強し病みつつあれば我は泣きけり

之等の歌によつて、彼女と節との關係はよく想像せられる。節が苦しいうちにも、彼女を心に描くことによつていかに大なる慰安を得てゐたかといふことも想像に難くないのである。家人を欺いては草花を携へて上京し、節を見舞つた女のひとの顏も見えるやうである。併し運命は遂にこの二人の上に幸ひしなかつた。

三

「鍼の如く」には、まだ女性についての歌がある。それは其五の一、卽ち節の日向旅行中の歌に、

漸く折生迫に戻れば同人の手紙などとゞきゐたるを一つ〳〵と披きみてはくりかへしつゝ

とこしへに慰もる人もあらなくに枕に潮のをらぶ夜は憂し

むらぎもの心はもとな遮莫をとめのことは暫しかたらず

とあるこの二首である、これだけでは固より詳しく知る由もない。併しその頃の歌を見るに、「夜ふけて思ひわづらふことのありて」といふやうな詞書が多い。この思ひ煩ふことを私は失戀だとひとりで解してをる。人の思ひでいちばん遣瀬ないものはもとより異性へ向ふ心である。これが滿たされなかつた時の不安と焦躁とを私は想像する。そしてそれを節の上に持つて行く。日向の旅もこの思ひをまぎらさんとする一つの手段ではなかつたかとも想像さるゝ。これはアラヽギの幹部の人々はよく知つてをらるゝ筈である。私は知らないから想像するのであるが、どうもそのやうに思へて成らぬ。たとへばこの二首についても、初めの歌のとこしへに慰もる人もあらなくに、は、たしかに、戀を失つた人の歎きである。病弱だつた彼は、常に、心からの看護者としても、又心の侶としても、妻とよぶ女が欲しかつたのであらう。しんから病人の看護の出來るものは「母」と「妻」のみである。これは私の信じて疑はぬ所であるが、節も旅に病んでつくづく心からの看護者としての母を思ひ妻を思つたことであらう。第二の歌はもとめつゝ、願ひのみたされざるを知つて歎き諦めんとする心である。

私は、節が女性について幸うすかりしを切に氣の毒におもふ。尤も、この薄幸が彼の歌品の秀れたものゝ多くを成すに力あつたことは疑ふべくもない。さすれば彼の薄幸は藝術家としては彼の多幸であつたともいふべきであらうか。これは藝術家の悲慘なる運命であるかも知れない。

謹嚴な人だけに節の女のことはよく分らないが、右の女のひとゝの交渉のみが、うす暗い彼の生涯の中の、たつた一つの明るみである。

四

この女性は同じ結城郡の山王といふところの黑田氏の令孃で眞弓さんとよぶ人であつた。女子大學も出た立派な人であつた。横瀨夜雨氏のいふところによれば、節はかねてこ

の女性を迎へることになつてゐたが、喉頭結核の診斷をうけると共にその約束を破棄してしまつた。その後黑田氏が何んとしても他へ嫁ぐことを承知せず、苦しんでゐると聞いていつそ思ひ切つて貰はう、短かい緣で終るとも悔いぬといふなら貰はうと決心して、京都の宿から橋詰孝一郎氏（節の友人、下妻中學教頭）にその意をつたへたが、遂にこの話はまとまらなかつたのである。節が赤彥氏に、彼女は婚約が破れた以來一回も外出せず一室に引き籠つてゐると語つたのはこの時のことである。

夜雨氏の追悼文の中には

其うち日向で長塚君を診てゐる從弟の弟が下總から來て、はしなくも、私につたへたものは、長塚君對黑田氏のいきさつが纏つて、長塚君の苦痛の大半はとり去られたといふ吉報であつた。自分は涙のこぼれる程の思ひで、初めて日向へあてゝ歸路黑田氏同道で横根（夜雨氏の村の名か）へ寄れ。君達二人のためにお赤飯（こは）もたかう、大根も煮やう。君から送られたアネモネはほけたれどダリヤは咲き亂れてゐる。二人できつと寄れ、と書いた。その返事は二日に亙つて二つ來た。併し私はそれを他人にみせる考へはない。

とある。一度はまとまりかけた緣談も遂に不調となつてしまつたのである。この氣の毒な結婚の事件が節の寂しかつた生涯をさらに寂しくする。併し節が生來の木强漢でも女嫌ひでもなかつたことはその多くの手紙や文章の中から容易に拾ひ出すことが出來る。胸のうちには强い〳〵感情を祕めてゐたのである。それが病患のために、遂に開かずして、一生を終つたのである。さうおもふと彼の一生が涙の出るほどいたましいものに思はれる。

一三死の前後

一

節が福岡の大學病院に再度入院したのは大正四年正月四日であつた。その時の模樣に就て當時病院の醫員であつた高崎醫學士は次の如く記るしてゐる。

正月四日の朝僕の宅に便りが來たので、急いで馳けつけたが、惡寒と四十度餘りの熱とで昨夜は一睡も出來なかつたらしい。苦しさうな息使ひで痩せた顏がポッと赤味を帶びて常よりも綺麗に見えた。勿論二三日中ベットの上に寢たきりである。外は空が凄くて北風が障子をがたつかせる。それに表通りを駈け歩るく下駄の音が騷々しい。すぐ久保博士に相談して入院の手續きをした。今迄診てゐたから內科の方は僕が擔當することにした。ところが惡寒や咳嗽が强くて經過が良くない。カテーテルで排尿せねばならぬ樣

になつた。弟さんの小布施工學士が來られたのは九日だつた。

高崎醫學士は名を義行といひ、私と同じ鹿兒島高等學校の出身で、中村憲吉君や今は亡き堀內卓造君等の親友であつた。私も會つて語つたこともあつた。節がこの人に病院で世話になつたのは一寸不思議な因緣である。ところが、不幸にしてこの若い醫學士も先年病氣で亡くなられた由聞いた。

高崎醫學士の文にあるやうに、節の令弟小布施工學士は九日に福岡についたが、その前に節は小布施氏にあてゝ次の手紙を送つてゐる。

年內漸次恢復すべしと存じ候に付母へはあまり非度く申さず候へども小生舊臘半ばよりあまりの寒さに感冒にかゝり、一時小康を得たりしも、新年に入りて九度以上の熱いで困却致し候に付漸く內科の助手にも盡力を請ひ、當病棟へ一昨夜入院致し候。けふは熱餘程退き候へども疲勞を感じて困り申候。併し頭もその時以來急に疼痛を增し難儀に有之、つくづくと寒氣の恐るべきを感じ申候。當病棟は宿屋よりはるかに暖かく、それのみうれしく存じ申候。何分にも苦しきには閉口致し候。それにつき、いつかの葉書に書

きつけ候北里研究所の志賀博士の注射液は未だ發表せされど非常のものゝ由、十一月十七日の報知新聞に有之候が如何にや。お尋ね被下度候。

いつぞやの佃煮まだ澤山有之候。小生齒が惡き上あの位のものにても喉頭を刺戟する故食べてもほんの少しづつなれば容易に減るまじく候。何んでも好きなものを十分食べろと申さるれど、當地には何にもなく、眼をつぶつて病院のまづき粥を無理に食べをり候。菓子などにても補ひに食べんと存じ候へども當地のカステラなどは論外にて候。上カステラはあまりに腹に溜り申候。腹にたまらぬ西洋菓子など博多に無之候。毎々御迷惑故澤山は要らず少し機會あらば御送り願上候。

いかにしても夜睡れざること三十餘日、これが困り候こと故、こゝへ參りて十日も居るうちには睡れもし、熱も退き、食慾も出で候事と存じ候。これのみたのしみに思ひ居り候。西洋菓子はやはり生がうまく存じ候。（大正四年一月六日夕、福岡大學醫院南隔離病棟六にて）

小布施氏はこの手紙を見て、驚いて福岡へ來たのであらう。何んでも好きなものを十分食べろ、などと醫者からいはれる樣になつては人間ももう仕方がない。

而も節は、自分は未だ〳〵小說も書きたい。仕事もしたい。健康が許せばとか、生命があればとか口癖のやうに言つてゐたさうである。せめて今二三年の命が欲しいと語つてゐたさうである。これは入院中擔任の醫員に語つた言葉である。あの頭腦と、あの手腕と、あの人となりとを以て、今十年を生き永らへたならばと、まことに痛惜にたえない。どんなに生きたかつたであらうか、と思ふと、涙が出る程哀しまれる。

二、

再度の入院後約一ヶ月の後、二月八日午前十時節は遂に不歸の客となつてしまつたのであるが、臨終の模樣につき、同病院醫員醫學士川邊治作氏の記るす所の一節を引く。

節さんの脣はがさ〳〵に乾いてゐました。半ば開いた瞳は心持濁つて光らしい光はありませんでした。小皺の寄つた額は蠟色を呈して少しも動きませんでした。咽の邊がごろごろと痰でもからまつてゐるやうな音を立てゝゐました。手も足も作りつけの人形のやうにしやちこばつてゐました。それでも尙靈と肉との交涉はつきませんでした。節さん

の二の腕には蚤の刺したやうなやゝ紫色をした注射の跡が幾つも幾つも並んでゐました。注射の針が幾度射されても節さんはすやすやと睡つてゐました。或時はやゝ力強く指先きを屈めてみるやうな所作もしました。頭髪をかくすやうなこともしました。併しそれ等はみんな一時的の迷ひでした。冷汗を流してゐる瞼の上は白い布がすうと走ることもありました。それが私の手からでも附添の嫗の手からでも又節さんのお父さんの手からでも少しも變つた現象はありませんでした。節さんの頭のすぐ上にはハンケチに包んで電燈が薄暗く瞬いてゐました。白いベットの傍には東京からその夜ついたと云ふ樽柿の赤い色と少しも手のつかぬ牛乳の刷り硝子色とそれからロートワインの赤紫色とが沈んだ色彩の配合を浮べてゐました。嫗は念佛を唱へて俯向き勝ちでした。節さんのお父さんは長い鬚を振はして度々眼鏡の曇りを拭ひました。看護婦の指にはたえず注射器と時計の針が動いてゐました。私は黒色の影像が帝王のやうに統治する深い溪谷の中を覗き込むやうな心持になつて節さんの顔をぢつと見つめてゐました。

節さんは白い蒲團の下に抑へつけられたやうに上向けになつて頸だけは、やゝ左に曲けてゐました。而してだん〳〵沈んで行く呼吸が次第に細つて行く脈搏とつれ添うて、節さんの魂を誘ひ出すやうに思はれました……

私は蒲團の端を心持ちもち上げて、節さんの二の腕と手首との暖さとを計つてみました。而してそれが變りのない時に節さんを今一度會話の人に引き戻すことが出來るものと思ひました。が、それは頼りない迷ひでした。節さんの呼吸と脈搏とはその最後の地點を指して急ぎました。私は節さんの脣に冷水を含めました時、それから節さんのお父さんが末期の水を與へました時、その時にはすでに東が白んだ明るみと薄暗くなつた電燈の光が半々に節さんの顔を照して死の色合が鮮明にあらはれました。

この叙述はいかにも節の臨終を書きあらはしてゐるとおもふ。嚴父の顔まで讀めるやうだ。節の三十七年の生涯はかくして九州に來て終つたのである。

節の絶筆は一月三十一日の夜、久保博士にあてゝ原稿紙へ萬年筆で書いた傳票樣の私信である。アララギの長塚節追悼號に寫眞版として入れてある。脫字が多く、字も體を成さないで讀み難い。卷末の説明によれば次の如くである。

熱のある時に一番樂しいのは素湯を心ゆくばかり飲むことです。けれどもそれが今は咽せて咳が出でて止まらな（いの一字を脱す）程のことがあります。ヒロイン水とかいふ咳止を夜飲むのにも、あれを三十回餘にして樂飲みで樂みます。（飲みますの意か）咳は二時過から少しはじまつて夜にかけます。液體を飲むはいつといふ區別はありません。どうか先生素湯を十分のめる樣に願ひます。水樂（藥の誤か）も困難の一つであります。

一月三十一日　節

久保先生

三

夏目漱石は臨終に

早く注射してくれ。死ぬと困るから

といつた。さうしてこの言葉のために一部の人から批難をうけた。氏は生前常に生死を超越すべきことを說いてゐたからである。平生エラさうなことを言つていてもイザとなれば弱音を吐く。漱石の思想も人格も凡人のそれと少しも違ひはしない、といふやうな批難であつた。これに就いては阿部次郎氏が思想誌上で思想と人の自然的素質と矛盾するものであることを說いて先生のために辯護した外に、他にも贊難種々の論があらはれた。が、今それ等の說の引用や、死の問題の評論は直接用のない事故茲には省略する。但だ、私は節が、

どうか先生、素湯を十分のめる樣に願ます

と久保博士に愬へた心持とが、どこか似通つてゐるやうな氣がして、茲に一寸漱石の臨終の言葉を引いたのである。

いかなる名僧智識も大人格も哲人も死の前には苦しみ慄くであらう。これは卑怯でも臆病でもなく、「人」の本能である。生けるものゝ本性である。死の闇黑に直面する時、人は本能的に、又盲目的に生へ執着する。これは生けるものゝ心の奥に潛める生への意思の力である。生きんとする意志、Wille zum Leben である。決して精神的に苦悶したのでもなく又死を怯ぢ怖れたのでもない。

阿部氏は結言して、「とにかく先生は我等の間に一つの問題になる言葉を殘して、最も先生らしく死んで行かれた。さうして自分はこの言葉をどんな意味に解釋しても、それは先生の德を累す可き性質のものでなかつたことを信じてゐる」といつてゐる。

漱石の死は大正五年十二月九日であつた。

子規は明治三十五年九月十九日午前一時昏睡狀態のまゝ逝いたが、枕頭のものもそのことゝ切れし瞬間を知らなかつた程であつたらしく、(盧子の文によれば)臨終にはさして苦悶もしなかつた。その前の日には午前十一時頃には、あの

糸瓜咲いて痰のつまりし佛かな

痰一斗糸瓜の水も間にあはず

をとゝひの糸瓜の水も取らざりき

の三句の俳句をかいた程である。前の日といつてもほんの半日かそこいら前のことである。これによつてみれば子規は殆ど朽木の倒れる如く、おのづから死んで行つたのである。これはあまりの長病であつたため、肉體も心氣も挫けはてゝ、何の正體もなく、睡るが如くに息絶えたと見るべきであらう。久しい間の苦惱ではあつたが、臨終は安らかであつたやうである。

漱石にも節にも辭世の詠はなかつた。

四

說述が大ぶ外れてしまつたが、とにかく、節は二月七日の夜昏睡狀態に陷り八日の午前十時に亡くなつたのである。

あくる日(九日)の午前、故人が尊敬してゐた崇福寺の和尙が來られて屍室で讀經、すぐに棺に移して嚴父及令弟小布施氏の外久保博士掛下高崎西卷川邊の諸君、平野屋の主人、嫗さん、私等附添つて裏門から大學前通りの泥濘を踏んで崇福寺に行く。久保夫人は屍室の前で送られる。崇福寺では鐘を打つて迎壇を設けて祀り、和尙以下番僧小僧の讀經あり、一同燒香して更に燒場に向ひました。寺の墓地から豐平村の畑中の小徑皆が外套の襟を立て、帽子を眞深に引いて、棺を圍んで歩きました。この日は風の強い寒い

日でした。

これは矢張り節を診療した大學病院の曾田共助氏の文である。當時の模樣がよく分る。十一日遺骨は東京に着、小布施氏宅にて通夜。十二日愈郷里岡田村に歸着。三月十四日佛式を以て葬送したのである。

その遺骨を埋めた丘は「芋堀り」の卷頭に寫された丘の一部である。櫟林を背景にしたその墓地に立てば、筑波も見え、鬼怒川も見える。篠やぶの末に動く白帆も見える。ゆるやかな傾斜の山畑は水田に續いて、節の經營した竹林も一目に眺められるといふ。

私は一度節の墓に詣でたいと思つてゐる。

東京から葬式に列した平穂百穂氏の歌をこゝに轉載させていたゞく。それは大正四年四月のアラヽギに掲載せられたものである。

長塚節の葬式

三月十三日朝來雪。長塚節氏の葬儀に參列の爲午後上野發。秀眞氏瓊音氏同行す。石下驛一泊。翌十四日快晴。鬼怒川の渡をわたりて岡田村國生に着。雪解の惡路言語に絶えたり。

往來の人手に手に棒切れを拔げるを見る。親戚故舊及び村人等雲集皆ひそやかに家の內外にあり。君が長篇「土」中の人物も眼前に活躍す。靈柩はかつて左翁と共に宿りし室の中央に安置せられたり。やがて三時頃五六の僧侶一樣に緋の衣をつけたるが來り、讀經柩を三周し終る。天臺宗なり。余等はこゝにて燒香歸途につく。四時出棺。墓地に送らる。車上に振り返りふり返り見るも只鐘の音哀しく森の中を練りゆくを聞くのみ。そこの藪、かしこの畑、はた氏が殖林せる竹林には雪斑らに、筑波の山も白く見ゆ。十餘年前氏及左翁と連れ立ちてこの土をふみしが、今は共に亡し。感慨無量。(三月二十日)

竹藪の蔭にのこれるはだら雪ひたぶる寂したへがてぬかも

たまたまに鐘を叩けるはふり今竹の林にかゝりけるかも

百姓の男ふたりが麥がらのもと火を持ちてはふりに立つも

造り花茗荷の花は五いろの花傘のごとつくられにけり

造り花茗荷の花は竹やぶにさやりにければ散りにけるかも

しなへ竹かぶさりかゝる暗がりを柩しづしづさやりつゝ行く

緋衣の導師は駕に乘りにけれ塗色はけしこの駕かなし

麥畑の丘のうねりに日あまねく光の中の人動きゐる

丘の邊にくろく群れゐる村人等たまたま駈ける童子等もみゆ

午後の日の光あまねき丘の邊の畑の中の墓原もみゆ

ほのかにも鐘の音きこゆ畑越えてわれは幾度もふりかへりつも

黄に光る夕日の中にうら悲しふりさけみれば雪つめる山

詞書に「十餘年前氏及左翁と連れ立ちてこの土をふみしが、今は共に亡し。感慨無量」と百穂氏はいつてゐる。左翁とは伊藤左千夫である。まことに感慨無量であつたに違ひないとおもはれる。村の葬式を歌ひ、亡友を偲んで、哀れ深い作である。私は生前遂に長塚氏に會はなかつたが、左千夫氏には屢行つて、教へを聞き、百穂氏には交誼を得てゐる。節のことを書いて、百穂氏の歌を思ひ出したので、且つ詞書によつて其地を知ることも出來るので、こゝに引用さして貰つたのであるが、私にとつてもいろ〳〵思ふことが淺くない。とにかく、私は近く節の村に行つて、お墓詣りをしたい。

一四　村の指導者

一

長塚師の人物乃至人格についてはすでに述べたが、繰返していへば、眞面目で、謹厳である。彼位、眞面目で謹厳な人間は醇撲な農村にも決して多くはない。學界にも稀であらう。政治家や商買人の間には殆ど絶無であらうとさへ思はれる。

大正四年二月福岡の大學病院で危篤に陷つた時、遙々國許から來た父の手を取つて、

お父さん、私のやうな無學な者が九州のはてに來て、久保博士をはじめ助手の諸君や看護婦の人々にまで肉親も及ばぬ程の厚遇を蒙るのはたゞ眞面

目な仕事をして來た報いです。人間は眞面目でなければ駄目です。眞面目で骨折るより外はありませぬ。

といつたさうであるが、この「眞面目で骨折る」といふことは彼が一生を貫く生活信條であつた。

眞面目で骨折る時、そこに人格を生じ德を生む。彼の德望は鄕里の青年達を感化して遂に淫らな夜遊びの風を矯めるに至つたといふ。これについて次の如き話を聞いたことがある。卽ち、いづこの村にもあるやうに、節の村にも怠ける青年がゐて、節が旅行などに出ると、すぐ髮を長くして、明笛を吹いたり酒をのんだりする。然るに節が村にゐると謹愼して笛も吹かず、夜遊びもしない。節が旅行から戻つたときくと、互に警しめ合つて、ふらちな眞似は爲なかつたといふのである。

節は別に小言をいふでもないが、彼がたゞ村に居さへすれば青年達の風儀がよい。盆踊りのやうな、風儀の亂れ勝なものでも、節が監督して行らせれば、男女決して淫らな眞似をせず、一令の下に服して、無邪氣に美しく行はれたといふ。これは一に節の人格の力である。

藝術に眞面目で熱心であつた節は、百姓にも亦眞面目で熱心であつた。前記のやうな天然自然や動植物についての該博精密なる智識はこの眞面目と熱心から自然に到り得たものであるが、これを語るに十分なるものは彼の病院から兩親に寄せた書簡のかずゝである。

それはていねいな楷書の細字で、綿密に書き記るした長文の手紙であるが、內容は自分の病氣の容體の報知でなくて、鄕里の田畑の作物に關する注意書である。或は下女下男のこと、收獲のこと、小作料のことである。前畑の豆の取り入れはすんだか、芋畑には堆肥を入れたか、麥蒔はどう成つてゐるか、裏の竹林の手入はすんだか、下女のおふさはだらしがないから解雇せよ、勘助は正直者だから今一年雇ふて置け等、等、等、すべて斯の如くである。之が手の足りない家の主人か何んかであるならば首肯ける。然るに節は

富裕な地主の長男である。家には兩親があり、多くの人を使ふてをる。何も案じることはない。況んや彼は今大病でひとり寂しく病院の一室に仰臥してゐる。竹林の手入れが遲れても、麥蒔きが時を失しても彼の一命に較ぶれば大なる問題ではない。と、先づ、普通には考へらるゝ。然し節にはこれが大なる問題である。この已み難き彼の熱心には我々は唯だ頭を垂れるばかりである。眞面目である。頑固な位眞面目である。この眞面目が彼の藝術を生み、彼の人格を高めて行つたのである。

誠みに一二の手紙を拔いてみやうか。

國許なる母堂へ

堆肥、さつまの蔓の分は今二回位切り返すまではかびぬやう水をくれてよく〳〵注意すること。煙草、土草の分も水を一度やる必要あり。さつまの蔓の分を引返す時は肥出しの毛をよく交ぜること。

たな（地名）の裏の竹の枝は重ねて置きし分は葉が落ちたるべく、これは凡ての仕事の都合よろしき故その竹の葉はこれまで同樣全部掻き出して宅へ引き取り堆肥にすること。

藏の屋敷の先頃堆肥を入れし場所に土がほんとうに掛かりをらぬ所あるかなきかよく見て掛らぬ所あらば十分に掛けて置くこと。

たなの裏の此間伐りし部分は三尺置きに堀に掘つて堆肥を入れておく。

一反歩と見て木の葉を殘らずと肥出しの青刈豌豆と青草の殘りの分だけとにてよろしかるべし。それでも千貫目に足らねば麥藁のを足すこと。

但堆肥はどの分も何百何十貫目と明瞭に區別し、出した月日を併せて記るし置くこと。これは清の手帳へ控へさせること。

栗畑は早く片附けて國松に開墾させること必要。松粗朶を卵屋が欲しき由、尤も全部にて三十五束の割にして貰ひたしと鼻龜申し居りしが篤と御相談肝腎に候事。

眞木は全部何程出來候や。松は五十五圓以下に賣らぬがよろしく候。鼻

龜の周旋は少々注意して御相談宜しく候。（略）

竹の庭及裏の山に積みあるものは前新田の吉重にゆづりし跡も成可く賣却して可然候。吉重へはお竹の給金の全部は渡さぬがよろしく、況して給金以外など貸すこと出來不申候。前の清五郎へも貸さぬ由申せばそれは一言にて十分なるべく候。鼻龜周旋したがれど之は餘程注意を要し候。前新田の元吉などにもそれとなく相場を積らせ候事肝要に候。彼も世間の賣買も知りをる故大變の相違もなかるべく候。（略）又篠山の才助なども呼びて見せるがよろしく候。何んにしても鼻龜は安價の人間故、あてになり申さず候（略）

納屋屋敷の女竹も浪次に見せて宅に必要な分だけ除き、あとは賣却の事。女竹も中々高く候。小助は駄目故話を組まぬがよろしく、向石下の茂十さんなどにも見せてよろしく候。同處のはのびもあり中々よろしき品に候。只根ばき（根付のまゝ伐りし竹）故一年生のもの有之、これは安く候。棚竹はよきものは一束五六十錢の小賣に候。湯殿あたりの戸締りは嚴重にせねばよろしからず、錠前は水海屋にて買ひしもの行燈部屋に有之候。すべて戸締りは私より申し遣はしたりと清へ命令いたし置く事第一よろしと存じ候

一寸手すきに釜場の壁だけも塗らねば見惡く、これは大へんよろしからぬ儀に候。億劫にすればどこまでも駄目に候。

裏庭の唐萩も刈つてすつること。

本年度だけは小作の奬勵米は從前通りに出すがよろしと存じ候。但し去年の饅頭屋の如きは引いて出して可然候。

煙草の穀の禮に友右衛門へは非常に手間かゝりて損夫の話をして四十把位古舍の分を渡して相當と存じ候。政市へは同四十把、喜助へは十把、彌市へは反三十三四把の割にてよろしく候。

屋根替したらば古き萱草には煤つき居るべきにつき大事にぎつと縛つて

雨にあてぬ樣仕舞ひ置くこと肝要に候。（略）

傭人の男女は未だ話相成らず候や。男は庄八とすれば仕事に世話なき代り女の方の關係少し世話と存じ候。もし同人の世話する政治といふ者の娘をおき同人もおくとすれば馬場（村の名）にて兩人は何の關係なきかどうかよく聞きたゞす必要有之候。お豐の母親にふくませ一郎をよび出し中宿の婆などに本當の事聞かすればよろしく候。おつまなら申分なけれどこれは九分外づれ候事と存じ候。

榮吉の子が五箇（村の名）の木挽の子ならばそれ程心配無之と存じ候。尤も榮吉の子も兩親とも系統が系統故無暗に安心成りかね候。然しこれは人間がおとなしき故一年位は愼み申すべく候。豐次も望みとあれば五日なり十日なり置くもよろしく候へども丸奉行でなければ夜遊びの味をおぼえ朋輩を感化する心配も有之候故置くとなければ其邊源三郎立會の上十分申し渡す必要有之候。おつぎと清は置据のこと。おつぎなど何とか申し候はゞ他へ出せば男の心配ある旨兩親へ申し聞かせ岩吉へもその旨含ませ說得すれば纏り申すべく候。これは策略にては無之、實際の話本人の爲に有之候。（略）

小三郎の悴金十郎の件は本人や親へ申すより直接巡査へ話して邸宅内へ押込むことだけの注意をさせ候事最もよろしと存じ申候。私より武藤氏へ直接それだけの事申込むつもりに有之候。

おとさは何としても置かぬがよろしく一つはあの樣な墮落者をおきし結果若い衆も入り込み申し候。

私も一昨日手術して潰瘍の所は全部取り申候。たゞ小豆粒取り申候。大に樂に相成り申候（下略）

村の指導者

ずゐぶんと長い手紙であるが、これは大正三年（死去の前年）一月一日金澤病院から母君に宛て農事と傭人に關する注意を記し送つたものである。實にこまかで行き屆いた手紙である。而も斯樣な手紙を月々幾通となく出して

をる。その熱心と根氣とには全く驚嘆の外はないのである。

又大正三年十二月福岡より國許なる母君への書簡の一節に曰く

とうね竹を伐られぬ要心も大切に候。麥の蒔遅れは致し方無之候。只本年は暖氣故など申され候ては私には涙の出る程情けなく感ぜられ申候。百姓するものが何故にかく年々のことが解らぬものに候哉。麥蒔の節は暖氣にはきまりきつたる事に有之候。暖かい暖かいと申すうちに一時に寒くなりて悪い土地はすぐ霜害にかゝり申候。かくの如きは毎年の事故決してお忘れ下さるまじく遅れたならば遅れたにしてもよろしく仕事の都合にてそれは是非なき事、その點に私一言も不足は無之候。現在私毎年指圖してそれにて有之候。今年は暖氣など申す事、本當にかくお考へ相成りをり候ならば、あまりに有之、又私が何とか申すことを憚りての事ならば誠に申譯無之候。季節の事は今少しお呑込み下さらずしては困り申候。

まるで母を叱責する口吻である。節の如き几帳面な、眞面目な者から見たら大抵な人間はかくの如くに叱られるに違ひない。眞面目な者から見れば不眞面目な者は齒がゆくて叶はないものである。尤もこの場合は節の母堂が不眞面目なわけではなく、節の眞面目が極端なのである。麥蒔きが遅れたのを涙が出る程情けないといふ節であるから、母に向つてさへ腹が立つのである。

二

拜復、太師堂南桑畑趾のあき間の陸稻は門畑と同じ配合にてよろしく候。さつま趾あまり下等ならば早く刈り取り陸稻を蒔きてもよろしく候。但し配合は前同樣。さつま趾の分七郎平屋敷へ入れ候事至極よろしと存じ候。あまりを女竹の間へ施すことも結構と存じ申候。門畑七畝歩、梨畑元屋敷へ敷き込み候事も至極と存じ申候。梅畑の陸稻趾の分藏の下大工の前へ入れ候事も思ひ付と存じ申候。餘分の處置はいか樣とも御顧ひ申

上候。甚右衛門屋敷へ入れる事なぞは殊によろしくと存じ申候。納屋屋敷の女竹のあき間へあまりを入れしことも思ひ付と存じ申候。屋根替の節の分は私歸宅まで御待下され度候。味噌蓋は陸稻へ入れしことこの上もなく存じ候。大豆一俵も私歸宅まで御待願上候。陸稻蒔付の際毛肥しを入れ候はゞアムモニアの必要之れ無しと存じ申候

陸稻蒔付は堆肥三百貫匁、アムモニア一貫匁、但し之は更めて買ふ必要有之間敷候。灰六貫匁

大豆蒔付には新開地は堆肥二百貫匁、燐酸二貫匁、灰二貫匁

豌豆趾及豐作の分。堆肥百貫匁、燐酸一貫匁、灰二貫匁

凡て前便に申上候へども爲念書き添へ申候。

これは大正三年一月金澤病院から母堂宛に送つた手紙であつて、尙此後に各所有地別(大師堂、梅畑、新田等)に作物の種類と肥料の分量並に施肥の方法を細かに記るした注意書を添へ、例へば、

アブラ蟲のつきたる梅の木へとりもちを塗ること

陸稻は必ずあつい處は拔いてうすい處で植ゑる。一番うなひにて下肥をやる。六月下旬頃追肥をやる。

など、まるで農事試驗場の技師の手帳でも見るやうな明細なメモを書いて送つてをるのである。百姓もこれだけ熱心になれば面白いに違ひない。面白くなかつたり、苦しかつたりするのは未だ熱心が足りないからである。

麥や芋をつくるにさへこれだけの苦心と努力が要る。苟も藝術の名を冠らす所の文學美術の作品に對して現代の藝術家はどれだけの藝術的良心を以て制作しつゝあるか。私が現代の多くの詩歌人や文士に衷心からの尊敬を拂ひ能はざるは節の如き眞面目なる人物を知つてをる爲である。

三

それは偖置き、節は青年を薫育し、村を指導するためには色々と工夫し骨

折つた。いづこも同じ地方農村の青年のことであるから、風俗は決してよくない。然るに節がおされて岡田村の青年會長となるや、村の青年の氣風は大にあらたまつた。節は會長として「土」の中にあらはれる、あの無智の青年を指導するために實に苦心した。即ち先づ小學校の校長と協力して補習學校を起し、又時々自宅に農事改良の講習會も開いて、作物の研究をする。或は試作田を定めて稻作の改良を圖り、又庭前の竹林に炭竈を築いて炭燒の改良を企て、（このこと既に言へり）或は肥料の講習會を開いて堆肥についての研究を村の人人と一緒にした。竹林を經營するために岐阜の在の坪井伊助といふ人をたづねて、教へをうけたことは有名な話である。かくて岡田村の青年會は明治四十二年には郡から表彰せられる程の成績を擧げた。又彼の研究した肥料も次第に上等のものが出來るやうになり、終に茨城縣の模範堆肥となるに至つた。皆節の力である。

村の若い者の風紀も漸次矯正せられ、少くとも節の村にゐる間は男女間のみだらな風儀もあらたまつたこと、之はこの章ですでに述べたところである。

農村問題は近頃次第にやかましいが、適當な指導者のないことも時弊の一である。節のやうな人が一人二人各村にゐて、青年男女を訓へ導くことにつとめたならば、農村は精神的にも物質的にも大に振興することゝ思はれる。唯だ目下我國の狀勢からすれば、種々の理由より、節のやうな眞面目なる指導者を得ることが殆ど不可能とも思はるゝ程に困難である。自ら進んで、身を以て彼等を訓へてやらうといふやうな犧牲的精神に富み、且つ勇氣ある指導者を現時の農村は切實に希求してゐる。

一五　血で描いた小説「土」と農村問題

一

鄉土藝術（Heimatkunst）といふ批評上の言葉がある。地方色（ローカルカラー）の如實なる表現を旨とする藝術の謂であらう。自然にも、人間にも、その鄉土の特色がヴヰヴヰドに描寫されなければならぬ。これを我國に求むる時、私はいつも先づ長塚節の藝術を思ひ起す。特にその傑作「土」を思ひ出す。

「土」は明治四十三年（彼が三十二歳の時）三ケ月以上に亙つて東京朝日新聞に掲載された長篇小說である。彼の鄉里鬼怒川沿岸の農村を背景として、そこに住む貧しい農民の生活を描いたものであるが、彼自ら農民であり、農業を營んでをる經驗から、村の自然を腕にまかせて細叙してをる。蟲魚の生活草木の凋落、人事の葛藤、年中行事、それ等の一つ一つが實に剋明に綿密に描寫されてゐるのである。

夏目漱石がこの小說に稱讚の長序を寄せてゐる。その一節に曰く

余は全く「土」に感心した。先づ何よりも先に是は到底余に書けるものでないと思つた。次に今の文壇で長塚君を除いたら誰が書けるだらうと物色して見た。すると矢張誰にも書けさうにないといふ結論に達した。

「土」の中に出て來る人物は最も貧しい百姓である。教育もなければ品格もなければたゞ土の上に生みつけられて土と共に生長した蛆同樣に憐れな百姓の生活である。先祖以來茨城の結城郡に居を移した地方の豪族として多數の小作人を使用する長塚君は彼等の獸類に近き恐るべく困憊を極めた生活狀態を一から十まで誠實にこの「土」の中に收め盡したのである。彼等の下卑で淺薄で迷信が强くて無邪氣で狡猾で無欲で殆ど余等の想像にさへ上りがたい所をありゝと眼に映るやうに描寫したのが「土」

である。さうして「土」は長塚君以外に何人も手を着けられない苦しい百姓生活の最も獣類に接近した部分を精細に直叙したものであるから誰も書けないといふのである。

漱石をして余も書けない、文壇の誰にも書けないと言はしめた作品である。「土」の眞價が分らうではないか。

漱石又曰く

人事を離れた天然についても前同樣の批評をいかな讀者も容易に肯はなければすまぬ程作者は鬼怒川沿岸の景色や空や春や秋や雪や風を綿密に研究してをる。畠のもの、畔に立つ榛の木、蛙の聲、鳥の音苟くも彼の鄉土に存在する自然なら一點一劃の微に至るまで悉くその地方の特色を具へて叙述の筆に上つてをる。だから何處にどう出て來ても必ず獨特（ユニーク）である。この獨持の點を普通の作家の手に成つた自然の描寫の平凡なのに較べて余は誰も及ばないといふのである。余は彼の獨特（ユニーク）なのに敬服しながらその餘りに精細過ぎて話の筋を往々にして殺して了ふ失敗を歎じた位彼は精微な自然の觀察者である。

まことにこの言の通りである。「土」の自然描寫の精細についてはこれ以上言葉を加へるの無益なるを思ふが、その實例として、私は、こゝで「土」の一節田園の春の描寫を引いて讀者の一粲に供したい。

水に近いしめつた土が暖い日光を思ふいつぱいに吸うてその勢づいた土の微かな刺戟を根に感ぜしめるので田圃の榛の木の地味な蕾は眼に立たぬ間に少しづつ伸びてひら〳〵と動き易くなる。その刺戟から蛙は未だ蟄居の狀態にありながら稀にはそつちでもこつちでもくゝと鳴き出すことがある。空からさす日の光はそろ〳〵と熱度を増して土はそれを幾らでも吸うて止まぬ。土はすべてをだん〳〵と刺戟して堀のほとりには葦やとだしばや其他の草が空と相映じてすつきりとその首をもたける。やはらかさに滿された空氣を更ににぶくするやうに榛の木の花はひら〳〵血で描いた小說「土」と農村問題　二三一

とやまず動きながら煤のやうな花粉をまき散らしてゐる。蛙は假死の狀態から離れてやはらかな草の上に手をついては驚いたやうな樣子をして空を仰いでみる。さうして彼等は慌てたやうに聲を放つてその長い睡眠から復活したことを空に向つて告げる。それで遠く聞く時は彼等のさわがしい聲は只空にのみ響いて快げである。

彼等は更に春の到つたことを一切の生物に向つて促す。草や木が心づいてその活力を存分に發揮するのを見ないうちは鳴くことをやめまいとつとめる。田圃の榛の木はとうに花をすてゝ自分が先に若葉の姿になつて見せる。黃色味をふくんだ若葉がさわやかで且つ朗かな朝日を浴びて快い光を保ち乍ら青い空の下にまだ猶豫ふてゐる周圍の林を見る。岬のやうな形に偃うてゐる水田を抱へて周圍の林は漸くその本性のまに〳〵勝手に白つぽいのや赤つぽいのや黃色つぽいのや色々に茂つてそれが氣がついた時に急いで一つの深い緣になるのである。雜木林のそこらこゝらに散在してゐる開墾地の麥もすつと首を出して蠶豆の花も可憐な黑い瞳をあつめてはづかしさうに葉の間からこつそりと四方を覗く。雜木林の間には又芒の硬直な葉が空を刺さうとして立つ。その麥や芒の下に居を求める雲雀が時々空を占めて春が闌けたとよびかける。さうするとその同族の聲のみが空間を支配してゐるべき筈だと思つてゐる蛙はその囀づる聲を壓し去らうとして互の體を飛び越え飛び越え鳴き立てゐるので小勢の雲雀はすつと下りて麥や芒の根に潛んでしまふ。さうしては蛙の鳴かぬ日中にのみ之を仰げば眩ゆさに堪へぬやうにその身を遙かにきらめく日の光の中に沒してその小さな咽喉のちぎれるまでは劇しく鳴らさうとするのである。蛙は愈々益々鳴き誇つて樫の木のやうな大きな常盤木の古葉をも一時にからりと落さねば止まないとする。

この精細な描寫の筆はまだ〳〵進むのであるが、際限がないからこゝらで止める。春の田園に生き伸びてゆく動物や植物がいかに綿密に、生々と描か

れてをるかは唯だこの一節によりても明かであらう。單に「蠶豆の花も可憐な黒い瞳をあつめてはづかしさうに葉の間から四方を覗く」といふ短い一つのセンテンスのうちにも春畝の青い營みと、そら豆の花の特性とは遺憾なきまでに寫されてをるではないか。

二

これは春の描寫である。が、夏も秋も冬も皆かくの如く綿密に剋明に描かれてゐる。そしてそれらの自然を背景として、勘次といふ小作人の一家族を中心に、村民の生活や村の年中行事や氣候風物の變化などが活寫されてゐるのである。無邪氣な村の者の戀や、息づまる如な生活苦、それに基く竊盜賠などの犯罪、一方には又其の樣な苦しい間にあつても、秋の祭や夏の夜の盆踊りに、日頃の苦しさを打ち忘れてうかれ樂しむ村人の行樂など、いかにも巧みに生々と描き出されてをる。あの月夜の盆踊りの光景なぞ實に生彩を極めたものである。

毎年極つた踊の場所は村の杜の大きな樅の木蔭である。勘次等三人が行つた時は踊子はもう大分集つてゐた。一足森に入れば激しく敲く太鼓の音がその急いで遠く響き去るのを周圍から遮り止めやうとして錯雜して繁つてゐる幹や小枝に打ッ突つてこぐらかつてゐるやうに森一杯に鳴り響いて上へ上へと恐ろしく人々の心を誘つた。男女が入り交つて太鼓を中央に輪をゐがいてゐる。それが一定の間隔を置いては一同が袋の口の紐を引いたやうに輪がしぼまつてばらり〳〵と手拍子を取つて又以前のやうに廣がる。さうしてその踊の手を反覆しつゝ徐ろに太鼓の周圍をめぐる。女は袖を長く見せるために手拭を折つて兩方の袂の先きへ縫ひ付けてそれから扱帶を襷にして結んだ長い端をだらりと後ろに垂れてゐる。扱帶は踊の手を描く度毎に袂と共にゆらり〳〵と搖れる。男は少し亂暴に女の體にこすり着け乍ら踊る。女はうるさい時は一寸踊の手をやめて

相手を叱つたり、叩いたり、而もその特性のつゝましさを保つて拍子を合せ乍ら大勢の間にもまれつゝ同一線を反覆しつゝ踊る。漸次に人數が殖えて大きな輪の内側に、更に小さな輪がゑがかれた。太鼓がだれゝば、

「太鼓がおろかぢや踊もおろかぢや

と口々に促しつゝ互に唄の聲を張り上げて踊る。太鼓の手が疲れゝば更に交替して撥も折れよと鳴らす。踊子は皆一齊に裝飾した笠を戴いてゐる。裝飾といつても夜目に鮮かなやうに饅重や其他のものを包む白いヘギ皮を夥しくゝり附けて置くのである。それが月光を遮つてゐる。樅の木蔭に著しく目に立つて身を動かすたんびに一齊にがさ〳〵と鳴り乍ら波の如く動いて彼等の風姿を添へてゐる。

踊の周圍には漸く村の見物が集つた……

これは自然の描寫ではない。村の年中行事の行樂を寫したものであるが、その描寫の精細なる技巧を見るには十分であらう。

自然描寫のこまかさはすでに引用した春の景色でも十分であるが、「土」の冒頭、木枯の村の夕暮を叙した一節は何となく、「土」一篇の空氣を暗示し且つその自然描寫の綿密をも知るに足るものである。曰く、

烈しい西風が目に見えぬ大きな塊をごうつと打ちつけては又ごうつと打ちつけて皆痩せこけた落葉木の林を一日苛め通した。木の枝は時々ひゆうひゆうと悲痛の響を立てゝ泣いた。短い冬の日はもう落ちかけて黄色な光を放射しつゝ目叩いた。さうして西風はどうかするとぱつたり止んで終つたかとおもふ程靜かになつた。泥を千切つて投げたやうな雲が不規則に林の上に凝然とひつゝいて居て空は未だ騒がしい事を示してゐる。それで時々思ひ出したやうに木の枝がざわ〳〵と鳴る。世間が俄かに心ぼそくなつた。

お品はまた天秤棒を卸した。

血で描いた小說「土」と農村問題　二三七

斯ういつた調子である。あまりに細かであるために、時にはくどくて倦怠を感じさせることがある。特に地方色を出すために、會話がすべて關東べいで書かれてあるので中々讀みづらい。併しそれがこの小說に深みを加へる原因となつてをるのである。

生活難から、こそ〳〵泥坊をやつて巡査に呼ばれる所がある。夜蔭に乘じて玉蜀黍を盜みにゆく所がある。放肆な、併しインノーセントな村の者の戀愛事件がある。作者はこれ等の一々を季節の自然を背景に取り込みつゝ巧みに描き出してゐる。これは下總の村の話であるが、私の鄕里である土佐の村に於ても村の若者の生活はこれと殆ど異るところはない。

三

節は久しく喉頭結核を病ひ、終にこれが爲に命をとられたのであるが、大作「土」を書いたことが、其病勢を募らせ、死期を早くした一因であつたといはれてをる。「土」は新聞で百數十回に亙つた長篇であるが、あれを書く時節は村の小學校に通つて、そこの圖書室の一部を借り、兒童用の腰掛に腰掛けて、毎日長時間懸命に書きつゞけた。それが爲に痔疾を引き起し、遂に病床につかねばならぬことが度々あつた。原稿は鉛筆で雜記帳に蠅の頭程の文字をていねいに書き列ねたもので、書いては消し、消しては書き、前後左右に線を引いて語句の訂正がしてある。一見いかに努力の文章であるかゞ分るのである。新聞に出す原稿は之を原稿用紙に格の正しい楷書で、一字々々ていねいに淨寫したものである。それを一二回分づつ新聞の編輯者の許へ毎日のやうに送つてくるのであるが、必ず書留郵便で送つてくる。當時、夏目漱石氏が東京朝日の文藝欄の編輯を擔當してゐたが、ひと頃、森田草平氏が代つてゐたので、私も折々森田氏へ遊びに行つて、その書留郵便で來た原稿を見たのであつたが、いつもその丁寧な原稿の文字におどろかされた。その頃私は小說に深い興味をもつてゐたので、「土」も愛讀してをり、ホト、ギスに

出る節の小説も注意して讀んでゐた。その頃の私は歌は少しも作らなかつたのである。

兎に角「土」は作者が精根の限りをつくした小説である。ほんとうに心血を注いだ小説である。かくの如きの根氣は容易に續くものではあるまい。而も節はそれを數ヶ月に亙つて、構想し、描寫し、淨寫し、更に書き改め、毫も倦むことを知らなかつたのである。

私はこの心血の努力をおもふ時、寧ろ悲慘な氣がする。節が「土」と血を流して搏鬪してゐるやうに見える。

夏目漱石の序文は親切にして精到であるが、その一節に曰く、

「土」を讀む者はきつと自分も泥の中をひきづられるやうな氣がするだらう。余もさういふ感じがした。或者はなぜ長塚君はこんな讀みづらいものを書いたのだらうと疑ふかも知れない。そんな人に對して余はたゞ一言、斯樣な生活をしてゐる人間が吾々と同時代に而も帝都を距る程遠からぬ田舍に住んでをるといふ悲慘な事實を葬と一度は胸の底に抱きしめて見たら、公等のこれから先の人生觀の上に、又公等の日常の行動の上に、何かの參考として、利益を與へはしまいかと聞きたい。余は特に歡樂に憧憬する若い男や若い女が讀みづらいのを我慢して、この小說を讀む勇氣を鼓舞することを希望するのである。余の娘が年頃になつて音樂會がどうだの、帝國座がどうだのなどと言ひ募る時分になつたら、余は是非この「土」を讀ましたいと思つてゐる。娘はきつと嫌だといふに違ひない。より多くの興味を感ずる戀愛小說と取り替へてくれといふに違ひない。けれども余はその時、娘に向つて、面白いから讀めといふのではない。苦しいから讀めといふのだと告げたいと思つてゐる。參考の爲だから、世間を知るためだから、知つて己れの人格の上に、暗い恐ろしい影を反射させるためだから我慢して讀めと忠告したいと思つてゐる。何も考へずに溫く生長した若い女（男でも同じである）の起す菩提心や

宗教心は皆この暗い影の奥から射してくるのだと余は固く信じてゐるからである。

あの漱石にこれだけの言葉を吐かせる作品が世に多くあらうとは思はれない。「土」は實にその稀有な作品の一つである。併しこれは「土」のみでない。「炭燒の娘」も、「芋掘り」も、「太十とその犬」も皆同じ筆に成り、同じ態度を以つて描かれた作品である。痛感と體驗とを以つて藻掻き、喘ぐ如くに描かれたものが彼の小說である。又かくして歌はれたものが彼の歌である。故に彼の作品は小說も詩歌も實に苦しい作物である。

四

讀者よ。「土」については私は言ひたいことの多くを持つてをる。又引用したい章節を多く知つてをる。併し私はそれを差し控へるであらう。何故といつて、今引用した漱石の序の最後の節は「土」の價値と特質を言ひ盡して餘す所がないからである。「土」を讀むことは汝の人生觀のためだ、汝の活き方のためだ、苦しくても之を讀めと漱石はいふ。玆に至つて「土」は一篇の小說ではない。實に其儘に生ける人間の記錄である。人間證券（ヒューマンドキュメント）である。農民生活の縮圖である。漱石は又いふ。「土」を讀むことは人生を知ることであり、人生を知つて、己れの人格の上に暗い恐ろしい影を反射させるためだ。そして何不自由なく溫く暢氣に生長した若い女の起す菩提心や宗教心はこの暗い影の奥から反射して來るのだ——と。こゝに至つて人間證券たる「土」は遂に「宗教の本」である。私も之を深く信ずる。農村問題に眼を着ける者は必ず「土」を一讀すべきである。

單に露西亞の農奴（サーフ）のみが、人生のどん底ではない。「土」のお品や勘次やおつぎや卯平によつて代表せらるゝ鬼怒川沿岸の小作人も亦これと多く異るところはない。彼は實に「蛆蟲の如く」に生きてをるのみである。希望もなく慰安もなく、快樂もない。息づまる程苦しい生活の連續である。たゞ彼等は血で描いた小說「土」と農村問題　二四三

それを意識しない。意識しないから苦痛は吾々の想像する程ではない。併しそれは實に動物と相距ることが遠からぬ生活である。收入の少ない上に、洪水、旱魃、その他の天變地異は彼等の生活をいやが上にも苦しくする。彼等の生活はいつまで經つても遂に希望の光を見出すことが出來ないのである。而も漱石のいふ如くに、かやうな氣の毒な人々が帝都を距ること程遠からぬ茨城縣鬼怒川の畔にをる、現在でも居るのである。けれどもこれは決して茨城縣のみではない。全國到る處に居るのである。但だ、長塚節が居らぬ。從つて「土」が出でない。百姓そのものは牛馬の如く、かつて己れの苦を訴へることを知らぬ階級である。それ故にかゝる事實が到る處にあるに拘らず、世上左程に驚しき問題とならぬのである。

けれども農民もいつまでも無智ではない。教育の普及と交通機關の進歩とは必然に彼等の智識を進ましめ、その生活上の自覺を喚起し、その結果彼等は必ず都會に向つて集る。かくて一國の事情を知り世界の大勢に通じ、都會の生活に馴れ、これを農村に知らしめる。緣の下の力持ももう我慢が出來ぬといふことになる。我も均しくこの國の民である。兵も稅も等しく負擔する。然るに我等の階級のみ獨り苦しみつゝ、而も希望の光がない。これは到底堪へられない。我等も考へなければならぬ。

――斯ういつた心持になる。これは必然の事である。かくて彼等は自ら悟り、おのづから起つた現今の農村問題、小作爭議はその必然の現はれである。さればこれは決して一時の出來心やかりそめの宣傳から來たものではない。その來たる所は遠くして深いのである。

從つて今後もこの問題は容易に除去せられず、否な益深刻になつて行くであらう。

節の「土」には未だ斯うした農民の自覺はない。たゞ單に貧困なる農民のあはれな忍從の生活をその儘に寫したものに過ぎない。時代意識のないのが一つの缺點ではあらう。レルモントフの農民小說がこの頃我文壇にも移植され

て好評の由である。これは作品の價値以外に、漸く農村問題の注目されだした我國の時代的要求にも依ることであらう。私は時々地方農村の講演會などに出掛けるが、大都會附近では、農村の文化も中々進んでをり、青年の智識慾の如きも盛んである。斯樣な時代の趨向に對して「土」の示唆する問題の影響は決して少なくないことを信ずるのである。

土の人長塚節　終

昭和十五年十二月一日　印刷
昭和十五年十二月五日　發行

土の人長塚節
(定價　金壹圓六拾錢)

著作者　橋田東聲　東京市日本橋區通三丁目八番地
發行者　和田利彦　東京市日本橋區通三丁目八番地
印刷者　木呂子斗鬼次　東京市牛込區木挽町四丁目一番地
印刷所　川安印刷所

著作者檢印

發行所　東京市日本橋通三丁目八番地
電話日本橋(24)三二一・一九四八・四三七三・四八四八
振替口座東京一六一七
株式會社　春陽堂書店

春陽堂既刊書目

		定價	送料
長塚節著	土	一・八〇	一四
橋田東聲著	土の人長塚節	一・六〇	一〇
大岡龍男著	妻を描く	一・五〇	一〇
北原武夫著	妻	一・六〇	一〇
南川潤著	失はれた季節	一・八〇	一四
新田潤著	夢みる人	二・〇〇	一四
一ノ瀬直行著	六區の女	一・五〇	一四
石河穆治著	蜂窩房	一・六〇	一四
澁川驍著	樽切湖	一・八〇	一四
綱野菊著	汽車の中で	一・八〇	一四
平川虎臣著	愛情浪漫	二・〇〇	一四

春陽堂既刊書目

		定價	送料
竹田敏彦著	女は泣かず	二・二〇	一四
竹田敏彦著	赤い手の娘達	一・九〇	一四
角田喜久雄著	鍔鳴浪人	一・八〇	一四
角田喜久雄著	髑髏錢	一・五〇	一四
三角寛著	瀬降と山刀	一・八〇	一四
三角寛著	掟	一・八〇	一四
三角寛著	親分と女房	一・八〇	一四
海晋寺潮五郎著	柳澤騒動	一・六〇	一四
城昌幸著	若さま侍捕物手帖	一・五〇	一四
岸哲夫著	乃木靜子夫人	一・七〇	一四
佐々木邦著	人生の年輪	一・五〇	一四

409
442

春陽堂既刊書目

			定價	送料
熊野隆治 豐島與志雄 著	み	かへりの塔	一・八〇	一四
相馬御風 著	大	愚良寛	二・五〇	一四
相馬御風 著	糸	魚川より	一・八〇	一四
齋藤清衛 著	は	てしなく歩む	一・六〇	一四
齋藤清衛 著	東	北の細道に立つ	一・六〇	一四
齋藤清衛 著	東	洋人の旅	一・八〇	一四
董其昌 撰 八幡關太郎 譯	畫	禪室隨筆	三・八〇	二二
益田甫 著	釣	ごよみ	二・五〇	一四
大山澄太 著	杉	本五郎中佐の尊皇と禪	一・〇〇	一〇
大山澄太 著	土	のこころ	近刊	
山崎益洲 述	無	門の門	一・四〇	一四

終